

Japanese  
Visions Of William Branham  
60-0930

ウィリアムブラナムの幻  
ジェファソンビル インディアナ州 アメリカ合衆国  
1960年09月30日



[www.messagehub.info](http://www.messagehub.info)

ウィリアム・マリオン・ブラナム  
"...第七の御使が吹き鳴らすラッパの音がする時には、神がその  
僕、預言者たちにお告げになったとおり、神の奥義は成就され  
る。" 黙示録 10:7

## はじめに

際立ったウィリアムブラナムのミニストリーは、マラキ4章4,5,6及びルカ書17:30と黙示録10:7と多くの聖書の預言に対する聖霊からの答えなのです。この世界規模のミニストリーはこの終わりの時に聖霊による神の御業の継続なのです。それは聖句の中にあり、イエスキリストの再臨のためにある人々を整えるために立ち上げるために必要とされていると書かれています。

あなたが祈り深くこのメッセージを読むとき、この印刷された御言葉があなたの心に刻まれるようにと祈ります。

メッセージの正しい転写、翻訳を提供できるように最善を尽くしておりますが、英語の録音がウィリアムブラナムによって語られた説教をもっともよく表しているものです。

オーディオや転写された1100の説教がウィリアムブラナムによって語られたものが無料でダウンロード可能で又多くの言語で印刷可能になっています。(日本語での翻訳あり)

変更が行わないかぎり、メッセージを無料でコピー、配布することは許可されています。

# ウィリアムブラナムの幻

1 これは神の国のために録音されているテープであり、私がそれを原稿用としてリー・ヴェイル兄弟に提出しているところです。

ヴェイル兄弟は、マーシアー兄弟の立ち会いのもとで、以前の幻のいくつかを話してほしいと私に頼まれました。

もちろん、幻というものは……。

私が思い出せる最初のことの一つは、幻が現れていたことです。

幻はいつも来ていました。

けれども、回心してから後のことについて、あなたは関心を持っておられるのだと思いますね、ヴェイル兄弟。

2 そうですね、私が当時教会があったジェファーソンビルワットのストリートにあるロイ・デイビス博士によってバプテスト教会で叙階された後、叙階から数週間も経たないうちに、いや、叙階から数日後に、ある素晴らしいビジョンを思い起こしたことを覚えています。病院の中に横たわっている老人のビジョンが潰れているのが見えました。彼は有色人種で、すぐに治ったので多くの混乱を引き起こしました。そして彼はベッドから起きて立ち去りました、そして2日、約2日後、私はニューアルバニーでサービス、無給サービス—水道代、ガス代、電気代—を遮断していました、そして私はとても満足していました古い家を見つけるたびに、ただ中に入って祈りました、ご存知のように、誰も住んでいませんでした。

3 そして、今日生きているジョニー・ポッツ氏にこう言ったのを覚えています。彼は70歳か80歳にはるかに近いと思います。彼は年老いたメーターリーダーでした。そして、彼らは彼を検針から外し、あなたがドアに入ると苦情や物、サービスコールを受け取るために彼を机の上に置きました。そして私は主が私に示してくださったことを彼に話していました。そして彼は時々、普通の男たちが得られなかった数メートルの迷走を拾っていた。そしてこの中で彼は、新聞で見た、当時古い荷馬車を持っていた男性が、路地でゴミやゴミを拾うために2頭の馬を運転したと語っていました。

エドワード・J・メリル氏という名前の有色人種の老人がいました。彼はニューアルバニーのクラークストリート1020番地に住んでいました。そして、彼は車

に乗っていた白人の少女と少年の2人の白人に轢かれ、車のコントロールを失い、ワゴンの車輪に押し込まれ、体の骨をすべて折ってしまいました。ほぼ、特に胸の部分を通して；彼の背中を所定の位置から外し、彼らは彼を病院に連れて行きました、とても悪い。

4　そして、ニューアルバニーの病院を通過していたポッツ氏は、主が私に対処してくださっていることを彼に話し、私のために祈りに来るように私を遣わしました。そしてすぐに、それが私がこのビジョンで見た男だと思いました。それで、私は行くのが少し怖かったです。なぜなら、それが私がそのようなことをした最初のことのひとつだったからです。しかし、私は改宗したばかりの友人、ジョルジュ・ド・アークというフランス人の少年を迎えに行きました。そして私は彼をキリストに導いたばかりでした。そして私たちは上って行き、私は言いました、「“さて、ジョージ兄弟、私に起こったこれらのことを覚えておいてほしいのです。”理解できないけど、この男が癒されることを覚えているでしょう。そして彼が治ると、彼の。…二人の白人が来てベッドの反対側に立つまで、私は彼のために祈ることはできません。なぜなら、私は示された方法で祈らなければならないからです。”

5　それで私は病院へ入って行って、メルルさんに会わせてほしいと頼みました。

そこへ行くと、奥さんが、彼は非常に重い状態で、身動きもできないのだと話してくれました。

というのは、レントゲン写真で、折れた骨のいくつかが肺のすぐそばに横たわっているのが分かったからでした。

それで、もし動けば、その骨が肺を突き刺してしまい、出血して死んでしまうかもしれない、ということだったのです。

彼の状態はとても悪く、喉からも少し出血していましたし、口のまわりにも血がにじんでいました。

もう二日ほど、そこに横たわったままでした。

その人は、その時たしか六十五歳くらいだったと思います。

六十歳か六十五歳くらいの、年配の男性でした。

長い口ひげは白くなっていて、髪にも白いものが混じっていました。

私は失敗もします。

私はひとり人間です。

そもそも失敗ばかりの者であり、キリストのしもべとしても、まことに貧しい代役にすぎません。

[ブラナム兄弟、人々の名前のつづりを述べる]

M-e-r-r-e-double l.

(メルル / Merrell)

[ヴェイル兄弟「それはそうかと思いました……」]

l-a-v...

[[「Nail は N-e-i-l ですか?」]]

N-a-i-l.

(ネイル / Nail)

[ヴェイル兄弟「Brace は B-r-a-c-e ですか?」]

B-r-a-c-e.

Ad. Ad Brace.

(ブレイス / Brace、アド・ブレイス)

[[「ええ。これで全部だと思えます。ああ、それからグラハム・シェリングでしたか?」]]

Graham, G-r-a-h-a-m, S-n-e-double l-i-n-g.

(グラハム・スネリング / Graham Snelling)

[ヴェイル兄弟「おお、スネリングですね。これで分かりました。あ……」]

6 それで私は中へ入って行き、この人に、主から見せられた幻のことを話しました。

すると、彼にぶつかった若者たちも入って来ました。

私は彼のためにひざまずいて祈りました。

すると突然、この人は大声を上げて、

「私は癒された!」

と言い、ぱっと飛び起きたのです。

奥さんは彼をベッドに押しとどめようとしたし、研修医の一人もやって来てベッドに寝かせておこうとしたが、彼はベッドから飛び出してしまい、大変な騒ぎになりました。

7 それで私が……ジョージ兄弟に言ったのです……。

すると、一人の姉妹が入って来ました

(そこはカトリックの病院でした)。

そして、その人を興奮させたのだから、ここから出て行ってください、と私に言いました。

彼は104度ほどの高熱があったからです。

ところが不思議なことに、彼を元の場所に戻し、何人かの医者たちが、服を着ようとしていた彼をベッドへ戻らせたあと、体温を測ってみると、熱はまったくなかったのです。

今日まで生きていて、その幻を見た人、その出来事が起こるのを見た人、あるいはそのことを知っている人が大勢います。

それから私は外へ出て、階段のところに立ち、ジョージ兄弟に言いました。

「さあ、見ていなさい。彼は茶色の上着を着て、プラグハットをかぶって、数分のうちにこの階段をまっすぐ下りて来るから。」

そして本当にその通りになったのです。

彼は実際に出て来て、そのまま階段を下りて行きました。

8 その翌日の夜ほどしてから、主がまた、夜明け頃のある朝に私に現れてくださいました。

そして、ひどく身体の不自由な一人の女性が癒されるのを示されたのです。

そこで私は、

「さて、その人がどこにいるのか、たぶん分かるだろう」

と言いました。

それで私は下のほうへ出かけて行き、たしかニュー・オールバニの八番街あたりで、水を止めようとしていました。

そこは二世帯住宅になっていて、私は両方の側の水を止めてしまったのではないかと心配になりました。

片方はもう人が引っ越していて、もう片方にはまだ人が住んでいました。

それで私は、人の住んでいるほうへ行って、戸をたたきました。

とても貧しい人たちでした。

すると、かなり粗末な身なりではありましたが、とても感じのよい若い娘さんが戸口に出て来ました。

彼女は、

「どんなご用でしょうか」

と言いました。

私は、

「水が止まっているかどうか、ちょっと見ていただけますか」

と言いました。

彼女は、

「はい」

の命令に従って行きます。」

32 そしてそのころ、彼女は泣き始め、ぱっと飛び起きたのです。

ちょうどその時、皆はようやくネイル夫人を起こして立たせたところでした。

彼女は気を失っていたところから目を覚ましたばかりでした。

すると、その娘さんがベッドから飛び下りた時、パジャマのズボンの裾が上がりました。

そして右足には——まさに幻に示された通りに——男の子のようなひざではなく、女の子の丸いひざがあったのです。

それを見ると、ネイル夫人はまたしてもその場に崩れ落ちてしまいました。

また失神したのです。

これで三度目でした。

そしてその娘さんは、その部屋の中を歩いて出て行き、身支度をする部屋へ入って行きました。

泣きながら着物のような部屋着を着て、それからまた歩いて戻って来て、髪をとかしていました。

その……不自由だったその手で。

右の手もまた麻痺していたのに、その不自由だった手で髪をとかしていたのです。

彼女は今では結婚していて、たくさん子どもがいます。

名前は……今は何という名前になっているのか分かりませんが、ネイル家の娘さんであったことは、ハロルド・ネイルを知る人なら誰でも分かるでしょう。

そして、あれらの幻は真実なのです。

33 私は、そのようなことが起こった人たちのところへあなたをお連れすることができますし、そうした出来事だけでも何冊もの本になるほどです。

ヴェイル兄弟、これは本当のことです。

た。

そして廊下の右手の部屋の戸を開けると——大きな田舎の家でした——そこには、黄色い壁紙に赤い模様があり、

「God bless our home(神がわたしたちの家を祝福してくださいように)」

という札が掛かっていて、古い真鍮の柱付きベッドがあり、左手には塊炭ストーブが置いてありました。

そしてそこに、小さな簡易ベッドがあつて、その上に、男の子のように見えるその少女が横たわっていたのです。

31 すると、その時、何かが起こりました。

私は部屋の隅の上のほうにいて、自分の体はそのベッドのところへ行くのを見ていたのです。

そして私は、主が言われた通りに、彼女の腹の上にちょうどそのまま手を置きました。

私がそうした時、ネイル夫人が部屋に入って来て、それを見るなり、また床に倒れて気を失ってしまいました。

あの方は少し弱い体質の人で、また床に倒れてしまったのです。

それでネイル兄弟が、彼女を介抱しようとしていました。

そして年配のジム兄弟は、そこに立って、

「主をほめたたえます」

と言いながら、両手を合わせていました。

皆さんは、あの兄弟がどんなふうだったかご存じでしょう。

それで私はその様子を見ていました。

そして、そのように見ながら、私は彼女の上に……いや、このように彼女の腹の上に手を置いて、こう言いました。

「主よ、私はこれを、神がそうするようにと私に告げておられると信じて、そ

と言って見に行き、それから、

「いいえ、まだ水は出ています」

と言いました。

私は、

「ありがとうございます」

と言いました。

すると、彼女の母親がベッドに横になっておられました。

その方の名前はメアリー・ダリル・オハニオン夫人といました。

そして彼女はアルメニア人でした。

その息子さんは、たしかニュー・オールバニのフットボールチームでフルバックをしていたと思います。

そして娘さんは高校生で、名前はドロシーといました。

すると……ドロシーが私にこう言いました。

「あなたは、この前病院で癒しをなさった、あの神の人ではありませんか。母があなたにお話したいと言っています。」

9 それで私は中へ入り、彼女はこう話してくれました……。

彼女は床に伏していて、体が不自由なままでした。

そして、この娘さんが生まれて以来、十七年間ずっと寝たきりだったのです。

その娘さんは十七歳でした。

それで私は彼女に……。

すると彼女は、

「あなたが、あの男性を癒した神の人なのですか」

と言いました。

私は言いました。

「いいえ、奥さん。私は癒す者ではありません。私はただ、その病人のために祈っただけです。そして、私に告げた何かによって示されたのです。」

私は、それを何と呼べばよいのか分かりませんでした。

幻と呼ぶべきなのか、何なのか、まだ分からなかったのです。

その頃の私はまだ若い独身の青年で、何もかもまだこれからという時でした。

それで、そこには……

10 それでこの婦人が、自分のために祈ってほしいと私に頼みました。

私は彼女に、まず自分が祈ってみます、そして主が戻るように示してくださるなら、また来ます、と言いました。

それから外へ出て祈りに行った時、私はジョージ兄弟を呼んで言いました。

「この人こそ、私が祈ったあの婦人ですよ。間違いなく同じ人です。いっしょに来てください。」

それで私たちは、祈りをささげるためにそこへ上がって行きました。

そしてこの十七歳の娘さんは……。

もちろん私もまだ若い青年にすぎませんでしたし、彼女には六つか八つくらいの弟もいました。

その家にはクリスマスツリーが立っていました

(クリスマスのすぐあとでしたから)。

するとその子たちは、そのクリスマスツリーの陰に隠れて、私が母親を良くしてみせるといっているので、私を笑おうとしていたのです。

11 私は彼女に、主があなたを癒してくださるのです、と言いました。

そしてジョージ兄弟と私は、ひざまずいて祈りました。

と言いました。

私は、

「はい、受け取りました」

と言いました。

彼女は言いました。

「私はハロルド・ネイルの妻です。」

私は言いました。

「お会いできてうれしいです、ネイル夫人。こちらは、あなたの娘さんのために祈るため、私と一緒に来た人たちです。」

彼女は、

「そうですか」

と言いました。

私は言いました。

「娘さんは、今から癒されます。」

すると彼女は、

「えっ？」

と言いました。

そして唇が震え始め、泣き出しました。

私は、

「はい、そうです」

と言いました。

それから私は、その婦人のところで立ち止まりませんでした。

そのまま廊下をまっすぐ進み、私と一緒に来た人たちも後について来まし

それで彼も幻の中に含まれていたわけです。

何が起きているのか、彼には分かっていませんでした。

それから私は向きを変えました。

そして私たちは、ようやく気がついたブレイス夫人を落ち着かせてから、そこへ向かいました。

家の庭へ入って行き、車を降りて、中へ入ろうとしました。

そして、その場所へ向かって上がって行くと、ふくよかな若い女性が戸口に出て来ました。

私は言いました。

「ほら、あの人です。」

すると彼女は、

「こんにちは」

と言いました。

私も、

「こんにちは」

と言いました。

そして、

「私はビル兄弟です」

と言いました。

すると彼女は、

「ああ、やっぱりそうだと思います。」

と言って、

「私の手紙を受け取ってくださったのですね」

私が祈り始めた時、あの御使い——あなたが写真で見ているあの御使いが、ベッドの上にかかっているのが見えました。

それで私は身を乗り出して、彼女の手を取りました。

そして言いました。

「オハニオン夫人……。」

今、彼女はご主人と家族とともに、ニュー・オールバニに住んでいます。

私は言いました。

「オハニオン夫人、主イエスが私を遣わされ、あなたのために祈りに行く前から、あなたが癒されることを私に教えてくださいました。イエスの御名によって立ち上がり、良くなりなさい。」

彼女の足は、下へ折れ曲がったようになっていました。

彼女はアルメニア語の聖書を胸に抱いたまま、ベッドの脇へ動き始めました。

するとその時、サタンが私に語りかけてきました。

「もしあの人を床に下ろしたら、あんな高いベッドから落ちて首を折ってしまうぞ。」

私は一瞬怖くなりました。

けれども、あれらの幻——その時はそれが何なのか分かりませんでしたが——私に告げるものは、いつも正しかったのです。

それで、とにかくそのまま進み、彼女がベッドから下りるに任せました。

神を証人として申し上げますが、彼女がそのベッドから下りようとしたその瞬間、両足はまっすぐになりました。

娘さんは悲鳴を上げ、髪をかきむしりながら通りへ駆け出し、できる限り大きな声で叫びました。

近所の人たちが、あちらこちらから集まって来ました。

そしてそこに、十七年ぶりに初めて、その部屋の中を歩き回りながら神を賛

美している彼女がいたのです。

私はその場を離れるために、すぐに立ち去りました。

その後、私はその若い娘さんと親しくなり、彼女と交際しました。

もちろん、これは記録に残す必要はありませんが、その若い娘さんと付き合っていました。

12 その少し後、数週間してからのことです。

ある晩、私は母の家にはいました。

その日はずっと祈っていたのですが、どうしても祈りの中で勝利へと突き抜けることができないように感じていました。

それで、もうそのまま……そのまま床に就こうかと思ったのです。

その頃は実家に泊まっていました。

それで私は部屋へ入って祈りました。

たしか夜中の一時ごろだったと思います。

そして祈っていると、突然ふと目を上げました。

母はよく、自分の服を脱ぐと椅子の上にぼんと積み重ねて置いていたものでした。

私たちは本当に貧しかったのです。

私は、何か白いものがこちらへ近づいて来るのを見ました。

最初は、その服の積んである椅子を見ているのかと思いました。

けれども、それは主の御使い、あの雲だったのです。

13 そしてそれは、私のいるところまでやって来ました。

私は部屋の中に立っていました。

それは、こちらで言うところの shotgun house のような、小さなまっすぐの家で、二部屋しかありませんでした。

と言いました。

すると彼は言いました。

「半マイルほど行き過ぎていますよ。最初の左の道を曲がってください。進んで行くと大きな赤い納屋がありますから、その赤い納屋のところで入ります。」

そして、

「その細い道を入れて行くと、右側の二軒目の家ですよ」

と言いました。

私は、

「ありがとうございます」

と言いました。

すると彼は、

「どうしてですか？」

と言いました。

私は言いました。

「その方には、病気の娘さんがおられるでしょう。」

彼は、

「はい、その通りです」

と言いました。

私は言いました。

「主がその娘さんを癒してくださるのです。」

すると、その年配の男性は泣き出しました。

ほら、その人は何も知らなかったのです。

そして、

「ほら、あの黄色い店先です。」

と言いました。

さらに私は言いました。

「さあ、見ていてください。青いオーバーオールを着て、黄色いコーデュロイの帽子をかぶり、白い口ひげのある男の人が、あそこから出て来て、私に道を教えてくれるはずですよ。もしそうでなければ、私は大ぼら吹きということになります。」

それで皆、じっと待っていました。

そして私がその場所の前まで車をつけると、ちょうどその時、その男の人が出て来ました。

青いオーバーオールを着て、黄色いコーデュロイの帽子をかぶり、白い口ひげを生やしていました。

ブレイス夫人は、それがその通りに起こるのを見て、車の中で気を失ってしまいました。

私はその人に言いました。

「失礼ですが、ハロルド・ネイルさんのお宅を教えてくださいることになっているのですが。」

すると彼は言いました。

「はい、そうです。」

そして、

「南のほうから来られたんですか」

と言いました。

私は、

「はい」

横のほうには赤い羽目板が張ってありました。

私の右手には、小さな鉄の柱付きベッドがありました。

そして黒髪の女性が一人立っていて……その一つの部屋は台所へ続いていたのですが、彼女はその台所の戸口のところに立って泣いていました。

そこには父親が立っていて、赤ん坊を抱いて私のところへ連れて来ていました。

その子は、小さな胸の上に何かがかぶさっているようで、左足はねじれて体に巻きつくようになり、右足はその反対向きにねじれていました。

両腕もまた体に巻きつくようになっていました。

小さな体は、首のあたりまでねじれ、曲がってしまっていたのです。

私は、

「これはどういう意味だろう」

と思いました。

そして左のほうを見ると、そこに一人の年配の女性が座っていて、眼鏡を外し、涙なのか何かなのか、眼鏡についたものを拭いていました。

右手のほうには、赤いデュオフォールドの椅子がありました。

その椅子は、さきほどの椅子とおそろいでした。

そこには金髪で巻き毛の若い男の子が座っていて、窓の外を見ていました。

さらにずっと右手のほうを見ると、そこに主の御使いが立っていました。

そしてその御使いが私に言いました。

「この赤ん坊は生きられるか。」

私は言いました。

「主よ、私には分かりません。」

するとその御使いは言いました。

「その子の上に手を置きなさい。そうすれば生きる。」

それで私はそうしました。

するとその赤ん坊は、父親の腕の中からぴよんと飛び降りました。

そして小さな右足のねじれがほどけ、右側がまっすぐになり、右腕もまっすぐになりました。

それからもう一步踏み出すと、今度は反対側のねじれもほどけました。

さらにもう一步進むと、体の真ん中の部分までねじれがほどけたのです。

そしてその子は、小さな手を私の手の中に入れて、こう言いました。

「ブラナム兄弟、ぼくはすっかり良くなりました。」

その小さな赤ん坊は、青いコーデロイのオーバーオール……胸当てのついた小さなつなぎを着ていました。

髪は茶色で、口はとても小さくて愛らしいものでした。

14 すると主の御使いが私に告げました……。

その方は、私を別の場所へ連れて行こうとしておられました。

私ははるか遠くへ運ばれ、そして古い墓地のそばに座らされました。

そこで、その御使いは教会の近くにある墓石の数字を私に示し、こう言われました。

「ここが、おまえの導きの場所になる。」

それからまた別の場所へ連れて行かれました。

そこは、小さな町のように見えました。店が二軒ほどあるだけのような所でした。

そのうちの一軒は正面が黄色で、壁板も黄色でした。

私はそこへ歩いて行ったか、あるいはそこに立っていたのですが、一人の

た。

あのあたりより上のほうへ行ったことも、まったくなかったのです。

そして私は言いました。

「その名前と番号を見て、こちらへ来てください。そしてこの墓石にあるものと同じかどうか確かめてみてください。」

すると、まさにその通りだったのです。

私は言いました。

「これだ。これで分かった。私たちは正しい道にいる。」

それが主の御使いだったのです。

私はその場所のすぐそばを通り過ぎていたのに、それと気づけなかったのです。

ああ、主は完全なお方です。

それで私たちはさらに先へ進んで行きました。

やがて一人の男性に出会ったので、私は言いました。

「失礼ですが、サウス・ボストンがどこか教えていただけますか。」

すると彼は、

「右へ曲がって、それから左へ……」

といった具合に道を教えてくれました。

30 そして私たちは、そのまままっすぐ進み続けました。

しばらくして、ある小さな場所へ入って行きました。

そこは小さな村のような所でした。

私は見て、こう言いました。

「ここだ、ここだ、まさにここです。」

それで私は車を降りました。

あの小さな古いロードスターでしたから、女の人たちはお互いの膝の上に座っているような具合でした。

私は車から降りて、車の後ろへ回りました。

そして頭を垂れ、車の後ろのバンパーに足をかけました。

それから、こう言いました。

「天の父よ、あなたのしもべに何を知らせようとしておられるのですか。」

私は祈りましたが、何も起こりませんでした。

それで少しのあいだ待ちました。

そして思いました……。

たいてい、こんなふうにならなければならぬのです。

それで私は、しばらくそのまま待ちました。

29 ふと、あちらのほうを見るように引きつけられました。

そして思ったのです。

「おや、ここにあの古い教会があるじゃないか。」

もしそこへ行かれることがあれば、それはバンカー・ヒル教会です。

私は横のほうを見ました。

すると「バンカー・ヒル・キリスト教会」とあり、教会の真正面には墓地の墓石が並んでいました。

それで私はそこへ行きました。

私は言いました。

「さあ、みなさん、その手紙を持っていますね。」

私はそれまでの生涯で、その地方へ行ったことは一度もありませんでした。

年老いた男性が出て来ました。

その人は青いコーデロイの上着……あるいは青いジーンの上着に、青いオーバーオール、そして黄色いコーデロイの帽子を身につけていて、大きな白い口ひげを生やしていました。

その人はこう言いました。

「その人が道を教えてくれる。」

次に気がついた時、私は……一人の、ややふくよかな若い女性のあとについて部屋へ入って行くところでした。

その戸口を入ると、壁の紙の模様は赤でした。

戸の上には、

「God bless our home(神がわたしたちの家を祝福してくださいませように)」

という札がかかっていた。

私の右手には、大きな古い真鍮の柱付きベッドがあり、左手には塊炭ストーブが置いてありました。

そして隅のほうには、十五歳くらいの少女が横になっていました。

その子は、小児まひか何かで、右足が引きつって上に縮み、足先は横を向いていて、体の下へ引き込まれるようになっていました。

見たところは男の子のようでしたが、髪は女の子のようでした。

そして唇は、女の子らしいハート形をしていました。

すると御使いが私に言いました。

「その娘は歩けるようになるか。」

私は答えました。

「主よ、私には分かりません。」

すると御使いは言いました。

「行って、その子の腹に手を置きなさい。」

それで私は、やはり男の子なのだろうと思いました。

お腹の上に手を置くよう言われたからです。

それで、言われた通りにしました。

すると、誰かが

「主をほめたたえます！」

と言うのが聞こえました。

私は顔を上げて見ました。

すると、その少女が起き上がっていました。

そして起き上がった時、着ていたパジャマのズボンの裾が上がって、丸いひざが見えました。

それは女の子のひざのように丸く、男の子のようにごつごつしたものではありませんでした。

それで私は、その子が女の子なのだと分かりました。

彼女はパジャマ姿のまま、金髪をとかしながら、私のほうへ歩いて来ました。

その女性は、今もセイラムに住んでいます。

結婚していて、三人か四人の子どもがいます。

そして彼女の父と母も、今もそこに住んでいます。

15 それで私は我に返りました。

そして誰かが、

「ブラナム兄弟……いや、ビル兄弟。ああ、ビル兄弟」

と言っているのが聞こえました。

母が私を呼んでいたのです。

それで私はヘンリービルへ行って、そこでまた尋ねました。

すると、

「この道を曲がって行きなさい。ここらの丘陵地帯の奥へ十五マイルほど入ったところです。小さな場所が見つかるはずですが……見落とさないように気をつけてください」

と言われました。

そして、

「店が一軒あるだけで、その店が郵便局も兼ねていて、ほかの用もみなそこで済ませるような所です」

とも言われました。

そのサウス・ボストンは、その丘陵地帯の中にありました。

そのあたりには一万七千エーカーもの丘が広がっていて、そこはその丘のさらに向こう、山あいにあつたのです。

28 それで私たちはそのまま車を走らせて行きました。

すると五、六マイルほど進んだころ、突然私はとても妙な感じがしてきました。

それで私は、

「おかしいな」

と言いました。

皆が、

「どうしたんですか」

と聞きました。

私は言いました。

「私に語りかけるあの方が、何か私に語ろうとしておられるのだと思います。だから、私は車を降りなければなりません。」

それで翌日、私の友人二人と、今の私の妻になる人、それからテキサスから来ていた一組の夫婦と一緒に行くことになりました。

その人たちの名前はブレイス夫妻、エド・ブレイスさんでした。

彼は今、ミルタウンの下のほうに住んでいる農夫です。

もともとは西部で牧場をしていた人でしたが、教会の近くにいたいということでこちらへ移って来たのです。

私は彼の奥さんのために祈ったことがあり、その奥さんは結核の症状から癒されていました。

それで彼は、このことが起こるのを見たかったのです。

私は言いました。

「一緒に来てください。そして、これがその通りに起こるかどうかわせてください。」

ブレイス夫人は、その幻をまだ見たことがありませんでした。

それで、今の妻になる人も私と一緒に来ました。

それに、教会にいたあの年配の長老、昔の執事だったジム・ワイズハート兄弟も、それを見たいと言いました。

その頃、私は小さな古いロードスターに乗っていたので、皆をそこへぎゅうぎゅうに乗せて出かけました。

そしてニュー・オールバニの下のほうへ行き、その標識を見つけました。

ところが調べてみると、それはサウス・ボストンではなく、ニュー・ボストンだったのです。

それでどこへ行けばいいのか分からなくなり、ジェファソンヴィルへ戻って誰かに尋ねました。

すると誰かが郵便局へ行って尋ねてくれて、

「サウス・ボストンはヘンリービルの上のほうです」

と言いました。

私は、その幻から抜け出る時のように、少しぼんやりした感じで聞いていました。

それで、母の寝ていた隣の部屋に向かって、

「どうしたの、お母さん」

と言いました。

すると母は、

「誰かがあなたの戸をたたいてるよ」

と言いました。

そして私は、

「ビル兄弟！」

という声を聞きました。

それで戸を開けました。

すると一人の男性が入って来ました。

その人の名はジョン・エミルといました。

今はフロリダ州マイアミに住んでいます。

彼は言いました。

「ビル兄弟、あなたは私のことを覚えていないでしょう。」

私は言いました。

「ええ、たぶん覚えていないと思います。」

彼は言いました。

「あなたは私と私の家族にバプテスマを授けてくれました。でも……私は間違った道へ行ってしまいました。」

そしてこう言いました。

「私は以前ここで一人の男を殺してしまったのです。けんかの最中に拳で殴って、その首を折ってしまいました。」

さらに、

「小さな息子の一人を失いました。いちばん上の子です。」

と言い、そして、

「いちばん下の子が今、家で死にかけています」

と言いました。

また、

「この町の医者がたった今帰ったところで、その子は両肺肺炎で、もうほとんど息もできないと言ったのです」

と言いました。

そして、

「ただ……あなたのことが心に浮かんできて、来てその子のために祈ってくれないかと思ったのです」

と言いました。

さらに、

「ご存じの通り、私はグラハム・スネリングのいここです」

とも言いました。

そのグラハム・スネリングというのは、今ではグラハム・スネリング牧師ですが、その時はまだ牧師にはなっていませんでした。

立派なクリスチャンの青年でした。

彼は、

「彼は私のいここです。今から迎えに行つて来ます」

と言いました。

私はたまたま、あなたがお書きになった『イエス・キリストは昨日も今日も、いつまでも変わることのない方です。』という小冊子を読みました。

先日の晩、私たちは家で祈祷会を開いておりましたが、あなたが病人のために祈って良い結果を見ておられると聞きました。

私には十五歳になる、病に苦しむ娘がおります。

その娘は病床に伏しております。

そしてどうしても、あなたに来てこの娘のために祈っていただくべきだという思いが心から離れないのです。

どうか来ていただけないでしょうか。

敬具

ハロルド・ネイル夫人

インディアナ州サウス・ボストン」

私は言いました。

「これだ、その娘さんだ。間違いない。」

それで家に帰って母に話し、みんなにもそのことを話しました。

そして私は、

「その娘さんに違いない」

と言ったのです。

27 それからその晩、私は教会で皆にこう言いました。

「ここに、その場所が分かりました。サウス・ボストンがどこにあるか知っている人はいませんか。」

するとジョージ・ライト兄弟——皆さんもご存じのあの兄弟ですが——が、

「ブラナム兄弟、それは南のほうじゃないかと思ひます」

と言いました。

ハーブ・スコットさん——今もこの町に住んでおられますが、その人が私の上司でした——が、私に言いました。

私は下へ降りかけていたのですが、彼が、

「ビリー」

と言ったのです。

私は、

「はい」

と言いました。

すると彼は、

「帰る前に、おまえ宛ての手紙があるぞ」

と言いました。

私は、

「分かりました、ハーブ。すぐに取りに来ます」

と言いました。

それで私は、点検していた別の仕事をしに行き、その仕事を済ませようと思いました。

そしてその時、その手紙のことを思い出したのです。

それで私は行ってそれを受け取り、封を開けました。

すると、こう書いてありました。

「ブラナム様。

私の名前はネイルです。ハロルド・ネイルの妻です。

私たちはサウス・ボストンという所に住んでおります。

そして私たちは信仰としてはメソジストです。

彼は私の家から半マイルほど、町の下のほうに住んでいました。

そして彼は、

「彼を迎えに行って来ます。それで、あなたは上のほうへ行ってくださいますか」

と言いました。

16 私は言いました。

「はい、エミルさん。服を着れば、すぐに参ります。」

すると彼は言いました。

「私の車で迎えに来て、あなたを連れて行きます。」

私は、

「分かりました」

と言いました。

彼は言いました。

「グラハムを迎えて来たら……それで、赤ちゃんのためにみんなで祈っていただきたいのです。」

私は、

「分かりました」

と言いました。

それで支度を始めました。

すると母が、

「どうしたの」

と聞きました。

私は、

「小さな赤ちゃんが癒されることになっているんだ」

と言いました。

すると母は、

「癒される？」

と言いました。

私は、

「そうだよ、お母さん」

と言いました。

そして、

「帰って来たら、もっと話すよ」

と言いました。

それからしばらくすると、彼が戸をたたきました。

グラハム兄弟も一緒でした。

私たちは、今ではボートヤードとして知られている場所——その当時は古いハワード造船所でしたが——そこを通過して上のほうへ向かっていました。

私は言いました。

「エミルさん、あなたは……今どこに住んでおられるのですか。」

彼は言いました。

「ユーティカの上のほうです。」

私は言いました。

「あなたの家は、こちらで言う shotgun house、小さな二部屋の家ですね。」

彼は、

その古い小さな家の床には敷物もありませんでした。

すると母親が床の上をこちらへ歩いて来て、

「まあ、ビル兄弟だわ」

というふうに言いました。

その時、人々は何が起こるか見ようとして窓からのぞいていました。

そして、部屋の隅では、あの小さな男の子が遊んでいました。

三日目のことでした。

私は立ち止まり、ひと言も言いませんでした。

するとその子が、よちよちと床の上をこちらへ歩いて来て、小さな手を私の手の中へ差し出しました。

チョコレートミルクを飲んでいたので、その小さな口の上には、チョコレートミルクのひげのようなものがついていました。

そしてその子は、小さな手を私の手に入れて、こう言いました。

「ビル兄弟、ぼくはすっかり良くなりました。」

26 その晩、私は教会でそのことを話しました。

そしてこう言いました。

「どこかに、助けを必要としている足の不自由な娘さんがいます。」

私は、

「教会の皆さん、私はこれらのことが何を意味するのか分かりませんし、皆さんに説明することもできません」

と言いました。

その頃、私は公益会社で働いていました。

そして覚えているのですが、その一週間ほどあと、ある日、私は建物を出ようとしていました。

「水曜日の晩、教会の前に、あそこへ行きます」

と言いました。

その人たちは貧しい人たちでしたので、私たちは食料を入れたかごを作って持って行くことにしました。

それで私は言いました。

「みなさんも一緒に来てください。そして私がそこへ行って……家の周りまで来たら、私たちがその家のところへ着いた時に、よく見ていてください。あの小さな赤ちゃんが、チョコレートミルクか何かを飲んだあとで、ここにちよっと口ひげみたいなものをつけて、床の上をこちらへ歩いて来て、私の手に自分の手を入れて、こう言うのを見てください。

『ビル兄弟、ぼくはすっかり良くなりました。』

とね。」

この三歳ほどの小さな赤ちゃんのことです。

「その通りになるか、見ていてください。」

必要でしたら、この次の段落も続けて、同じ文体で訳します。

25 今の私の妻であるメダも、そのずっと前、まだ私たちが結婚する前でしたが、その一団の中にいました。

それで、一台のトラックいっぱいの人たちが行って、家のまわりに散って立ちました。

私とその晩、古い公益会社のトラックで家に着くの見ようとしていたのです。

(私は自分の車を持っていませんでした。)

荷台の後ろにはタールや、その日運んだり修理したりしていた道具類が積んでありました。

私は家の前まで運転して行って車を止め、玄関のポーチへ上がって戸をたたきました。

「はい、そうです」

と言いました。

私は言いました。

「丘の上に建っていますね。」

彼は、

「はい」

と言いました。

私は言いました。

「それから、家の下の腰板は本実(ほんざね)の板でできていて、赤く塗られていますね。」

彼は言いました。

「その通りです。」

17 私は言いました。

「その小さな赤ちゃんは、鉄の柱付きベッドに寝ています。そして家の中には、少なくとも青いコーデュロイのオーバーオールが一着あります。」

すると彼は言いました。

「その子は今、それを着ています。」

私は言いました。

「それから、その赤ちゃんは本当に小さな子で、三歳くらいです。そして口もとても小さく、唇も小さくて薄いです。髪は明るい茶色です。」

彼は言いました。

「まさにその通りです。」

私は言いました。

「エミル夫人は黒髪の女性です。そしてその部屋には、赤いデュオフォー

ルドと赤い椅子があります。」

すると彼は言いました。

「ブラナム兄弟、あなたは前にうちへ来たことがあるんですか。」

私は言いました。

「ほんの少し前に行きましたよ。」

「少し前に？」

と彼は言いました。

私は、

「ええ」

と言いました。

すると彼は、

「いや、私はあなたを見ませんでしたよ」

と言いました。

私は言いました。

「ええ、肉体ではなく、霊的にです。エミルさん、あなたは聞いたことがあるでしょう。私があなたにバプテスマを授けた時にも、私に起こるいろいろなことを話したはずです。私は、起こる前に物事を見るのです。」

彼は言いました。

「ええ。それで、ブラナム兄弟、そのようなことが今あなたに起こったのですか。」

私は言いました。

「ええ、エミルさん。何であれ、それが私に告げることは、一度も偽りだったことはありません。あなたの赤ちゃんは、私が着く時には癒されるのです。」

すると彼は車を止め、ハンドルにうづくまるようになりました。

「赤ちゃんをここへ連れて来てください。」

彼は言いました。

「ビル兄弟、あなたが言うことなら何でもします。抱き上げるのも怖くありません。」

というのは、その子を抱き上げると、息がすっかり止まりそうになるほどだったからです。

それでも彼はその小さな赤ちゃんを腕に抱き、私のところへ連れて来て、そこに立ちました。

私はその子の上に手を置いて言いました。

「主よ、あなたのしもべの愚かさをお赦してください。私はあなたの幻に先んじて語ってしまいました。しかし今、あなたが天地の神であられることを明らかにしてください。」

そう言い終わるか終わらないかのうちに、その小さな赤ちゃんは両腕を父親の首に回し、叫びながら泣き始め、

「パパ、もうだいじょうぶだよ」

と言ったのです。

私は言いました。

「エミルさん、その赤ちゃんはそのままにしておきなさい。完全に抜けるまで三日かかります。三步にわたってほどけていったのですから。」

24 私は家に帰りました。

そして教会でそのことを話しました。

私は言いました。

「私はもう一度あそこへ行きます。」

それは月曜日のことでした。

そして、

「今度は、あの年配の婦人がこの赤い椅子に座ってくれさえすれば。」

そして私は、オーバーコートを着て出かける支度をして立っていたエミルさんのいる戸口のところへ戻りました。

ひどく寒い日で、吹雪のような寒さでした。

すると、その年配の婦人がその椅子に座りました。

グラハム兄弟も座って頭を垂れました。

そして赤ちゃんの母親は戸口の上に手をかけて泣き始めました。

まさに、幻に示された通りでした。

そしてその年配の婦人も座りました。

ただ、その眼鏡についていたのは涙ばかりではなく、外の寒さで曇っていたのです。

彼女は小さなかばんの中に手を入れ、ハンカチ……あるいは小さな手提げの中から取り出して、その眼鏡を拭き始めました。

兄弟よ、まさにそれだったのです。

私はエミルさんに言いました。

「エミルさん、あなたは今でも、私をキリストのしもべとして信じてくださいますか。」

彼は言いました。

「もちろんです、ブラナム兄弟。」

私は言いました。

「今なら、あなたに言えます。少し前、私は幻より先に語ってしまったのです。だから起こらなかったのです。でも、もし今も私を信じてくださるなら、赤ちゃんをここへ連れて来てください。」

ああ、本当に。

その時、私はそれがまさに整ったのだと分かったのです。

そしてこう言いました。

「神よ、どうか私をあわれんでください。私を立ち返らせてください。ああ主よ。どうか……。もしあなたが私の赤ちゃんの命を助けてくださるなら、これから先の生涯ずっと、私はあなたのために生きることを約束します。」

18 私たちはその家に入りました。

彼のことで、そして一つのたましいがキリストに立ち返ったことで、みな大変興奮していました。

家の中へ入ると、そこにあるものは、年配の婦人がいないことを除けば、すべてまさにその通りに置かれていました。

私は高ぶっていて、あまりにも興奮していたので、

「赤ちゃんをここへ連れて来てください」

と言いました。

その赤ちゃんは、もうほんのかすかに生きているだけでした。

ほら、あのねじれ上がっていたというのは、その子の命が抜けかかっている、小さなのどのところまで縮み上がっていた、ということだったのです。

それで私は、

「赤ちゃんをこちらへ」

と言いました。

幻がそのまま成就するのを待たずに、そうしてしまったのです。

19 ヴェイル兄弟、もしこのパッドがここに置かれているはずなら、私はそのパッドがそこに置かれるまでは何も言えないのです。

分かりますか、示された通りでなければならないのです。

それで私は、

「赤ちゃんをこちらへ連れて来てください」

と言いました。

すると父親がその赤ちゃんを私のところへ連れて来たので、私はその子のために祈りました。

ところが、かえって悪くなってしまったのです。

それで私は思いました……。

実際、その子は息が絶えかけていて、息をさせるために、みんなで揺すったり、いろいろしなければなりませんでした。

私は、

「これは何かおかしい」

と思いました。

そしてふと、

「まだ来ていない、あの年配の婦人はどこだろう」

と思ったのです。

それで彼らは赤ちゃんを受け取って寝かせました。

鼻の下に何かを当てたり、あれこれしていました。

母親は取り乱して叫び声を上げ、みな泣いていましたが、その赤ちゃんはかすかに息をしているだけでした。

私は思いました。

「私は愚かにも、神の幻を取り扱いそこなってしまった。あまりに興奮しすぎて、それがその通りになるのを待たなかったからだ。」

20 このことで、ヴェイル兄弟、なぜ私が待つのかがお分かりになるでしょう。

誰が何を言おうと、私は待つのです。

私は兄弟としてあなたを愛しています。

けれども兄弟よ、私が主の御心をいただいていると感じている時には、どうか決して、こうなさいと私に言わないでください。

その人はいつもは表の戸から入って来るのですが、どういうわけか——今でも皆には分からないのですが——その時は裏口のほうへ回って、台所から入って来たのです。

そしてその小さな家の台所に入り、戸口のところまで来ました。

すると娘さんがそこへ駆け寄って、その人に口づけしました。

自分の母親でしたからね。

そしてグラハム兄弟にもあいさつをしました。

それから彼女は、

「赤ちゃんはよくなったの？」

と言いました。

すると娘は、

「お母さん、この子はもう死にそうなの」

と言って、そう叫び始めました。

そしてその母親も泣き出したのです。

23 その時私は思いました。

「もしこれがそのまま進めば……あとはグラハムが外へ出て行かなければ……。」

それで私は立ち上がりましたが、何も言えませんでした。

分かりますか、ただ待つしかなかったのです。

するとグラハム兄弟がこちらへ回って来ました。

私は彼が座れるように立ち上がりました。

その人たちは彼の親類でもありましたから、彼もまた泣き出して、座るはずになっていたそのデュオフォールドに腰を下ろしました。

私は思いました。

それが、その子に残っていた息のすべてだったのです。

22 あの時代には、今のようにペニシリンやそうしたものがなかったのです。

それで湿布のようなものを当てたり、そういう手当てをするだけでした。

けれども、その小さな赤ちゃんはもう何日もその状態で、命が尽きかけていたのです……いや、まさに尽きようとしていたのです。

それで私はそこに座りながら、

「困ったな、もしグラハムが行ってしまったら……」

とっていました。

グラハムは上着を着て、戸口のほうへ出て行こうとしました。

そして自分の妻に、

「すぐ戻るからね」

と言いました。

私は心の中で、

「神よ、そうなる私にはまたここに一日中、いや、もしかするともう一晩中でも、この幻を待っていなければならないではないか。どうしたらよいのだろう」

とと思いました。

その時、私は窓の外を見ました。

すると家の角を回って、その赤ちゃんの祖母がやって来るのが見えました。

(それが祖母だと分かったのは、あとになってからでした。)

そして彼女は眼鏡をかけていました。

私は、

「主よ、これだ。どうかグラハムがまだ戸を出て行きませんように」

とと思いました。

たとえ別のやり方のほうが、どんなによく見えたとしてもです。

私は主を待つのです。

そして私はここで、一つの教訓を学びました。

もう何年も何年も前に、主が言われる通りに正確に行い、主が「もうよい」と言われるまでは、それをしてはならない、ということ学んだのです。

21 赤ちゃんは息をしようともがいていました。

私は、自分が何をしてしまったのかを彼らに言うことはできませんでした。ただ待つしかなかったのです。

そして私は、

「もしかすると恵みがこれを覆ってくださり、私を赦してくださるかもしれない」

と思いました。

それで私は座りました。

彼らは夜が明けるまで、その赤ちゃんの命をつなぎとめようと必死でした。

夜が明け始めるころには、その子はもう今にも息を引き取りそうに思われました。

私はそこに座っていました。

すると彼らは何度も、

「ブラナム兄弟、どうしたらよいのでしょうか」

あるいは、

「ビル兄弟、どうしたらよいのでしょうか」

と尋ねました。

私は、

「分かりません」

と言うほかありませんでした。

私は頭を垂れたまま、

「主よ、どうか私を赦してください」

と祈っていました。

やがて夜が明けました。

グラハム・スネリング兄弟は仕事に行かなければなりませんでした。

それでエミルさんは彼を送って行かなければなりませんでした。

私は、自分もその家を出なければならぬことは分かっていました。

けれども、グラハム兄弟はそこに座っていなければならないはずだったのです。

というのも、あなたもご存じの通り、彼は金髪で巻き毛だからです。

彼は、そのデュオフォルドの上に座っているはずだったのです。

ところが私は、グラハム兄弟が座るはずのその場所に座っていました。

しかも、あの年配の婦人はまだ来ていませんでした。

そこには年配の婦人が一人もいなかったのです、私はそのままそこに座っていました。

そしてエミルさんは上着を着ました。

そこで私は分かったのです。

もしグラハム兄弟が出て行ってしまえば、いつ戻って来るか分からないということ。

そして、たとえその婦人が来たとしても、その時にはもうグラハム兄弟がそこにいないかもしれない、ということも分かっていました。

ですから、私がどんな状態に置かれていたか、お分かりになるでしょう。

それでエミルさんが言いました。

「ブラナム兄弟、帰りますか……」

あるいは、

「ビル兄弟、家に帰りますか。送って行きましょうか」

と言いました。

私は、

「いいえ、結構です。もし差し支えなければ、ここで待たせてください」

と言いました。

私は、その家にそこまで残るのが気が進みませんでした。

赤ちゃんと、その母親と、そして私だけになってしまうからです。

彼らは若い夫婦でした。

彼は二十五歳くらいだったと思いますし、私も同じくらいの年でした。

それで私は、

「いいえ、差し支えなければ、ここで待ちます」

と言いました。

すると彼は、

「かまいませんよ、ビル兄弟」

と言いました。

それで母親は、取り乱して部屋の中を歩き回り、泣いたり、あれこれしたりしていました。

そして赤ちゃんの様子はますます悪くなるばかりでした。

まるで、今にも息をしようとして、

「うっ、うっ」

とするだけのようでした。